北海道における縄文世界遺産の拠点機能のあり方に関する懇談会
第５回会合　議事概要

１　日　時　　令和５年１月２５日（水）１０：００～１１：２０
２　場　所　　道庁本庁舎１３階（塔屋）　環境生活部１号会議室
３　出席者　　（構成員）阿部　千春氏（道南歴史文化振興財団）
大津　和子氏（北海道ユネスコ連絡協議会）
國木田　大氏（北海道大学大学院）
渋谷　和憲氏（(公社)北海道観光振興機構）
森　　朋子氏（札幌市立大学）
（道　側）塚田文化局長、家山室長、寒河江主幹、児玉係長、村本主査
依田専門主任、梅田主事

４　議題
（１）第４回会合のまとめについて
（２）北海道における縄文世界遺産の拠点機能のあり方について

５　概要
１１月開催の第４回会合のまとめを行うとともに、北海道における縄文世界遺産の拠点機能のあり方について検討を行った。

６　主な意見
■　第４回会合のまとめについて
構成員の発言なし

■　北海道における縄文世界遺産の拠点機能のあり方について
（１）「拠点機能のあり方（案）」第４章までの前回会合における意見への主な対応状況について
（　森　）写真を増やすという話だが、出典は書かなくて良いのか。
（家　山）出典を入れることとする。
（大　津）14ページ「教育機能」留意点の最後の文章について、「各種講座やフォーラム開催のための十分なスペースは普及機能等と連携」の「連携」はわからなくもないが、「普及機能等と連携して確保する」との意味だと思う。「連携」だけでもわからなくはないが、（表現として）どうか。
（家　山）「確保する」という意味であり、わかりやすく修正させていただく。
この記載については16ページ、普及機能についても同じ趣旨の内容が書かれているため、同様に修正させていただく。
（大　津）注釈が各ページに入ったのでわかりやすくなった。
（家　山）注釈について、全体を通してその語句が一か所にだけ使われている場合で下に余白が空いている場合にはそのページに、複数か所に記載されている場合には用語解説に入れることにした。
（國木田）１ページの北海道の取組の図で、様々な計画が書かれている。文化財保護法の改正に伴って北海道としての理念や計画のようなものを公開していたと思うが（『北海道文化財保存活用大綱』のこと。）、これは入っていないのか。総合計画に入っているのか、別立てであるのか、それとも関係ないのか。
（村　本）道教委で作成した文化財保存活用大綱の中に世界遺産保護に関することや登録推進に関することの記載はあるが、拠点については書いていない。世界遺産は大事だから守って行きましょうとの記載はある。関連することはする。

（國木田）載せるほどのことではないということか。
（村　本）載せるかどうかについては検討する。記載することとなると、北海道の取組の中となる。
（塚　田）入れる場所としては、図１の右側、『北海道観光のくにづくり行動計画』の下あたりになる。
（　森　）確認したい事項ではあるが、２ページの図２に「ことばの定義と拠点機能の範囲」とあるが、「縄文世界遺産」という言葉は通称なのか。この言葉の出所はどこだったか。
（家　山）令和３年３月に策定した『北海道における縄文世界遺産の活用のあり方』から引用している。こちらの名称については、１ページ「拠点機能のあり方」の趣旨の８行目に記載している。
（　森　）今回もスライドして使用しているとのこと、承知した。
（家　山）第４章までについては、今いただいた意見を踏まえて検討・修正させていただく。ベースとしては、この記載内容とさせていただく。

（２）第５章機能実現のための組織や運営の手法について～第６章まとめについて
（　森　）ハブとスポークがメインになっても良いのではないか。１１ページに機能が７個並んでいて左に拠点機能とあるが、先ほど説明のあった総合調整も機能であり、このような言葉もとても大事。総合調整という言葉がどこかに入った方が良いと思う。それをもって、各個別の７つの機能を総合的に取りまとめる拠点機能。それも一つの大きな役割だと考える。この７つの機能は第４章まで、第５章はそれに加えて総合調整をどうするかを書いているとした方が分かりやすいと思うがいかがか。27ページの図９についても、もう少し工夫できる余地があると思う。「直営」「連携」という区分が良いのか、「ハブ」と「スポーク」という概念から書いていくのも良いと思う。中核拠点をどうするかはここでは書かないとのことだが、この図から想像するのは難しかったため、工夫が必要。
（家　山）総合調整については、２７ページ図９と２８ページの７つの機能の囲みの中に関係してくる。２７ページ図９の「ソフト・直営」の部分に、控えめに「拠点機能の運営に係る総合調整機能を置く」と書いているため、これを目立つように修正する。
（　森　）この図のフォーマット自体、これで良いのか。
（家　山）こちらも、もう一工夫させていただき、総合調整機能の書きぶりについても併せて再検討させていただく。
（　森　）見た人がわかる図である必要がある。26ページも文字ばかりなので、それをこの図を見て分かるようにすることが必要。中核拠点というハード面の物を作るということが、この図９でわかるか。
（家　山）本文の説明や内容と対応する形に近づけていきたい。２８ページの囲みの部分についても、囲みの外に注釈として７つの機能の他に「総合調整機能を置く」という表現を付け加えたい。
（　森　）図８はこのままで良いのか。
（阿　部）総合調整機能は機能を分散させるということによって必要となるものである。この図８はオペレーショナルガイドラインを分解して出てきたものなので、ここに「総合調整機能」は入ってこない。組織体制で「分散」という考え方が提示されたところで、付け加えていく方が良い。
（塚　田）これにより、図８と図9がリンクするようになるため、工夫が必要。
（　森　）７つの機能を集約することが必要で、その手法を検討するということが第５章で書かれているとわかるように記載したほうが良い。
分散させることを前提にしていないから、こうなるのはわかる。
（塚　田）第５章では組織や運営の手法について書かれているところだが、大前提として第４章までの拠点機能を発現するために考えていく必要があるともう一度整理した方が、何のための機能かということがわかりやすい。

（大　津）道外の東北の方では同じような拠点機能について検討されているのか。ご存じか。
（家　山）現状としては、青森・秋田・岩手、それぞれ県独自の検討はされていない。４道県全体をまとめる拠点のあり方についてどうしていくのかは、来年度までに重点的に検討するとされている。機能自体は本部の事務局で通常業務と併行して行われている。
（塚　田）保全に関わることや、機能についてやっている。研究機能は専門家委員会で行ってる状況。
（大　津）ありがとうございます。
（　森　）縄文遺跡群としての本部があって、それぞれの道県のあり方がある。我々の位置づけは図ではかけないのか。そこから運営体制で分散させます、このようなイメージで考えているという全体像があって、この位置づけが見えてくるとわかりやすくなる。
（塚　田）４道県との関係性を示すことはできる。他県のことは難しい。
（　森　）全体をまとめる組織は４道県にある。別に北海道の中枢拠点があり、機能を分散させるため、それを集約して調整する大きな機能である総合調整機能のことを考えないとならない、ということに繋がっていくと考える。
（家　山）分散して機能を確保していくのは大前提。どこに何をおいていくのかは決まっていない。ここできちんと書いてしまうと縛られてしまう。そうならないように工夫して柔軟に対応できる書き方としたい。
（　森　）役割を分担だとかの言葉があるため、その言葉を図にすることはできると思う。ハード面とソフト面を同じく分散させるが、ハード面の中核となる拠点の場所や総合調整機能のようなものについては今後検討が必要だとか考える絵になれば、次の段階の人が初めてみたときに、イメージがスムーズにわかるのではないか。言葉だけではなく概念図として、案としてでも書いておいた方が良いと思う。
（渋　谷）中核的な拠点の名称がどうなるのか気になる。その名前が関係する人、縄文に興味のある人、観光客を含め、わかりやすい名称だったら良い。他の県との関係性、どれだけ北海道の世界遺産に人がやってきているかは、北海道の中核組織で集約できるが、他県とのデータ連携が必要なのではないか。縄文に興味がある人が北海道だけを求めているわけではない。縄文全体として資料を整備されていくと良いと思う。
（家　山）遺跡を紹介するためにガイダンス施設の情報を載せたり、どの位の入場者が来ているのか等の情報をここに載せた方が良いという意見か。
（塚　田）中核機能は道内のことだけを所管するのではなく、道外の情報も連携を取りながら集約できる機能をもっておくことが必要だという意味か。
（渋　谷）そのとおり。
（　森　）それは総合調整の役割。道内のスポークとしての役割だけではなく、全体との調整を担う必要がある。そう明記すべき。
（塚　田）縄文遺跡群全体との連携はここがとる、ということを明記する必要がある。
（國木田）２８ページの「２今後の進め方」で、組織や運営のことをきちんとやると思うので、確定的な案として書くのは避けたい。自由度の高いものとした方が次の人はやりやすい。一括拠点は難しそうなので、総合調整というような新しい文言は工夫して入れた方が良い。
（大　津）裏表紙のロゴについて。２９ページの「未来へつづく、一万年ストーリー。」は、明るいイメージなので、最後に一緒に入っていたほうが親しみをもってもらえそう。
（　森　）青森の三内丸山遺跡を含む全体の縄文遺跡群とは、北海道が分散型の拠点機能を作るということの共通認識はもっているのか。それとも北海道で世界遺産センターをつくると思われているのか。

（家　山）世界遺産センターそのものではないが、北海道の中には６つの構成資産が広域に分散しているので、一つにまとめて統一感を持って発信していこうという拠点機能を検討しているということは青森県の世界遺産本部でも認識されている。
（　森　）北海道がこうしたいという意見は通るものなのか。
（家　山）道県独自で整備していくことについては、妨げられるものではない。
（國木田）２６ページ「ＰＰＰ」についてどこかで注釈を入れるか用語説明を入れた方が良い。
（大　津）２６ページ下から２行目では「民間との連携（ＰＰＰ）」と書かれているので、同じく「民間との連携」という意味で使われているのであれば、上の「ＰＰＰ」も同じように書けば良いのではないか。
（塚　田）調整させていただく。
これまでいただいた意見に基づいて整理していく。これまで５回に渡りお集まりいただき感謝申し上げる。

■今後のスケジュールについて
構成員の発言なし

7　懇談会に対するご意見や拠点に対する期待感など

■阿部構成員
拠点機能の大切な役割は「未来へつづく、一万年ストーリー。」が持つ本当の意味を広めていくことと思っています。
ユネスコのESDが示すように、国際社会には大きな課題が存在しますが、私たちを導く物語は失われています。私たちは「縄文」からどんな物語を創るのか？それは映画や小説のような形ではないかもしれません。もしかすると、縄文やESDに取り組んだ一人一人の「心の物語」なのかもしれません。ストーリーの形は様々なのだと思います。
そのことを考えるきっかけとなるのが、この拠点になることを願っています。

■大津構成員
懇談会につきましては、回を重ねるごとに内容・形式ともに整えられていき、拠点機能が明確になったと思います。
縄文世界遺産に対して、道内外、とりわけ北海道の若い世代に広く関心をもってもらえるように、拠点機能が十二分に発揮されることを期待しています。

■國木田構成員
全体を通しての感想としては、具体的な「拠点」がどこか決まっていない中で、そのあり方を議論したため、少し抽象的な内容が多かった印象は持ちました。ただし、今回策定した7つの機能（＋総合調整機能）は、どのような拠点になったとしても必要不可欠かと思いますので、次年度以降の議論の土台として進めて頂ければ幸いです。世界遺産の構成資産が分散化する傾向は、近年多くの遺産で目にしますので、他の世界遺産の取り組みも参考にする必要があるかと思いました。北海道が、そのような分散する世界遺産の先駆的な活用例として評価されることを期待しております。

■渋谷構成員
拠点機能のあり方についての議論を通じて、自分にとっては縄文世界遺産を深く知る機会でもありました。採取・漁労・狩猟などの自然の恵みによる定住生活や大きな争いがなかった歴史など農耕牧畜で定住生活を実現した大陸文化とは異なる成り立ち、精神文化にはとても興味深いものがあります。

観光の側面から見ると、縄文世界遺産の普遍的な価値は、知的好奇心旺盛な層のみならず一般的な観光客にも心に響くストーリーであり、国内、海外から多くの観光客の来訪を促すであろうと思います。

今後の拠点機能が具体化する中で、今回の議論が今後の方向性の一　助になれば幸いです。また、拠点機能が最大限に発揮されることをご期待申し上げます。

■森構成員

本委員会の枠組みが「北海道の縄文」であった点、私は意義があることだと思っておりました。また、本委員会の論点は拠点機能でしたが、第２章４節、北海道内の構成資産の特徴を理解し、「北海道の縄文」との関連性などを含め、北海道なりに定義することができれば、単なる６遺跡の世界遺産における位置付けのみならず、「北海道の縄文」の中に６遺跡を位置付け、世界の価値のみならず、地域の価値を最大限に活用した取り組みにつながる可能性があるのではないかと思っています。そこまで議論が深まれば、ロゴマークも表紙と裏表紙が逆転でき、本来の理想的な北海道におけるあり方になると思います。

一方で、個人的にはその他遺跡（「北海道の縄文」）を具体的にイメージして議論することはできませんでした。今後、ぜひ考古学等の先生方で「北海道の縄文」の価値を再認識するような場を設けるなど、継続議論いただき、世界遺産の６遺跡をそこに関連づけるくらいの気概で捉え直すことができるなら、拠点のハード面の整備も単に世界遺産のためだけではなく、北海道としてもっと積極的に取り組めるのではないでしょうか。そのためにも、「北海道の縄文」とは何か、「北海道の縄文」における世界遺産とは何かを説明する必要があると思います。今後、世界遺産の方で他県と拠点整備の議論が出るかとは思いますが、図９（作図ありがとうございました）の構成資産がある各市町のガイダンス施設に留まらず、「北海道の縄文」を連携していくことを大きな目標、グランドプランに、今後の議論を進めていただくことを期待しております。